

(中世の若狭湾 若狭湾を往来する人々と文化)

中世の若狭湾：文化の交差点

概要

12 世紀から 16 世紀にかけて、若狭湾は、首都と日本国内の目的地及びアジア大陸の目的地との間の中継点として機能した、日本海沿岸の重要な玄関口でした。食品、美術品、宗教的な道具などの品物が、小浜や敦賀などの大きな港を経由して取引され、それに伴う旅の増加は、思想の共有と文化交流に貢献しました。

もっと詳しく知る

食品、美術品、異国の動物の輸送

若狭湾からの北航路は北海道にまで至り、南西航路は九州や朝鮮半島まで伸びていました。荷物は食品や日用品だけでなく、像や絵画、経典、陶磁器などの貴重品も含まれていました。特筆すべきは、1408 年に小浜港に寄港した、日本に生息していない数匹の動物を乗せた大型船です。そのうちの 1 頭は象で、記録上初めて日本に入国し、後に第 4 代足利将軍である足利義持（1386 年～1428 年）に贈られました。

日本国内および外国との貿易関係

港に到着した多くの貴重品は他の目的地に送られましたが、中には若狭地方の有力な一族や寺院によって保存されたものもありました。1422 年、小浜の羽賀寺は、朝鮮の王朝である高麗（918 年～1392 年）から来た非常に貴重な経典の 1325 年の写本であった華麗な法華経を受け取りました。東北地方から来た武将の安倍康季が 1447 年に本堂を再建するための資金を提供したため、羽賀寺は日本国内の交易の繋がりからも恩恵を受けました。

若狭湾岸地域のキリスト教

若狭湾の港を通じて思想や信仰が日本にもたらされた多くの人々の中には、キリスト教の宣教師がいました。1560 年、イエズス会（ヤソ会とも知られる）は、養方軒パウロ（1596 年没）という名前で呼ばれていた若狭出身の男性に洗礼を授けました。1580 年、パウロとその息子の洞院グイセンテ（1540 年～1609 年）は、協会から新しい会員として認められました。二人は宗教書の貴重な翻訳を行い、日本における初期のキリスト教伝道活動に大きく貢献しました。

展示品

このセクションでは、若狭湾を通過したさまざまな商品や文化現象の多様さを示す品物などを紹介しています。中国から来た 13 世紀の仏像は、ヒンドゥー教の伝承から導入された鳥のような守護神で

あるカルラを表しています。1990年、ガラスのケースに置かれているぼろぼろの朱色の布に包まれたこの像が、小浜の海岸に打ち上げられているのが発見されました。

朝鮮半島からもたらされた1471年の地図の再版には、小浜の港が海外で認められたことを示す、小浜の印が書かれています。別の文書のコピーは、1408年に日本へ最初のゾウを運んだ船が、クジャク、サンバージカ、オウム、およびその他の外国産の動物も運んでいたことを明記しています。

1422年に羽賀寺に寄贈された法華経の複製は、非常に細かい挿絵と、紺色の紙に使用された銀や金の絵の具などの高価な素材が特徴です。

もう1つの展示品は、イエズス会への改宗者の養方軒パウロと洞院ヴィセンテが日本語に翻訳した、サントスのご作業の内抜書（聖人の行動の抜粋）と題されたキリスト教の聖人たちの生活を詳しく説明した教科書の復刻版です。特筆すべき点は、この書でラテン文字を使用していることです。

乳幼児を抱く白磁の像は、仏教の慈悲の菩薩である観音を表しています。16世紀に中国で作られたもので、この種のものでは若狭で唯一のもです。子どもを抱く観音は一般的な仏教の題材ですが、一部の日本のクリスチャンは、キリスト教神学におけるイエスの母である聖母マリアに視覚的および象徴的に類似しているため、マリア観音として、このような像を崇拜しました。